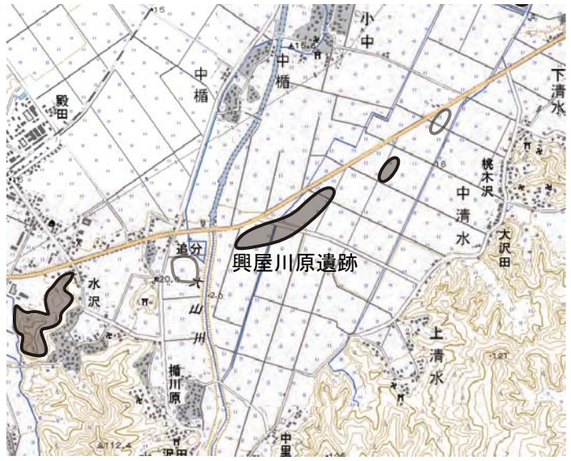
興屋川原（こうやがわら）遺跡発掘調査現地説明会資料

2006年11月19日（日）

財団法人山形県埋蔵文化財センター



遺跡位置図

1　調査の概要

興屋川原遺跡は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立ち、県教育委員会が実施した分布調査で新規に発見された遺跡です。高速道路路線内では周知であった矢馳Ａ遺跡、木の下館跡に加え、万治ヶ沢遺跡、行司免遺跡、玉作1遺跡、玉作2遺跡、岩崎遺跡、南田遺跡などが新規登録遺跡として登録されました。これらの遺跡は日本海沿岸東北自動車道の用地内に所在するため、日本道路公団東北支社(現　東日本高速道路株式会社東北支社)と山形県教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議がなされ、財団法人山形県埋蔵文化財センターに建設工事で破壊を受ける部分を記録保存のために緊急発掘調査を委託することで合意に至りました。

これを受け、16年度当センターは、このうち4遺跡で先行工事区を対象とした第１次調査を実施し、遺跡のさらに詳しい情報を収集しました。その結果、興屋川原遺跡は古墳時代と平安時代の広大な遺跡であることが分かり、昨年度と今年度の2年間にわたり現地調査をおこなうことになりました。

2　立地と環境

興屋川原遺跡は庄内平野の南西端部に位置し、鶴岡市街地から南西へ約10kmの鶴岡市田川地区と大泉地区にかけて所在します。遺跡は大山川右岸の沖積地上に立地し、周辺の地目は水田や畑地で、標高17mを測ります。かつてこの辺りは東西方向に自然堤防などの微高地と後背湿地などの低湿地が入り乱れる複雑な地形でした。圃場整備以前は深田であったものが、現在は大型機械に対応した整備された圃場となっています。しかし調査区の中には、これらの圃場整備により削平を受けた箇所も確認されています。

調査対象区は農道、水路で分割されているため、これらを便宜的にＡ区からＧ区までの７ヶ所に分けて進めました。昨年度はＡ区(平安)、Ｂ区(平安)、Ｃ区(古墳・平安)、Ｄ区(平安)、Ｅ区西側(古墳・平安)を対象としました。今年度は引き続きＥ区東側、Ｆ区、Ｇ区の調査を実施し、9月22日で1期工事分を対象とした地区が終了しました。引き続き10月・11月中にはＥ・Ｆ区の2期工事区を対象とした調査を行いました。

調査要項

遺　跡　名	興屋川原（こうやがわら）遺跡
遺跡番号	平成16年度登録
所　在　地	山形県鶴岡市大字田川字興屋川原
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
調査原因	日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設事業
調査面積	8,100㎡
現地調査	平成18年5月8日～平成18年11月30日
遺跡種別	集落跡・官衙跡
時　　代	古墳時代・平安時代
遺　　構	掘立柱建物跡・溝跡・土坑・ピット
遺　　物	土師器･赤焼土器・須恵器・鉄製品・柱根
調査担当者	調査第三課長　渋谷孝雄
	専門調査研究員　黒坂雅人
	調査研究員　齋藤　健（調査主任）
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社鶴岡工事事務所、庄内教育事務所、鶴岡市教育委員会

奈良･平安時代２間×６間大型建物(SB1001)遺構検出状況(北から)

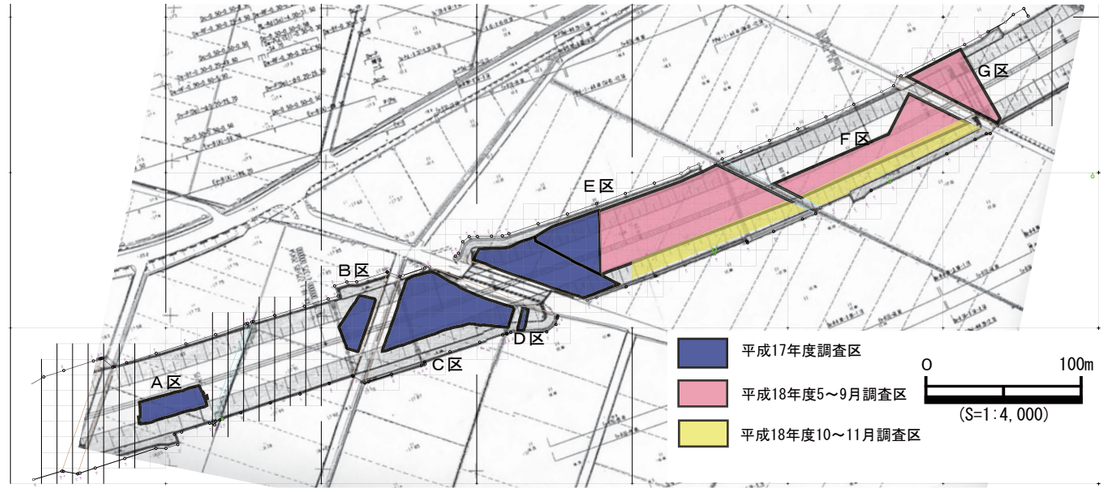
SB1001 掘り方の断面

3　遺　構

昨年度の調査では、古墳時代と平安時代の河川跡・掘立柱建物跡・土坑･井戸跡・柱穴などが見つかりました。

今年度の調査では、微高地となっているＥ区東側とＦ区東側に古墳時代と平安時代の遺構が集中して検出されました。また、近世以降の水路跡も検出されています。

特に、Ｆ区東側では柱間が２間×６間、そして2間×4間の大型の掘立柱建物跡と2間×3間の建物2棟が計画的に配置されていることが明らかとなりました。これらの大型建物や配置の様子は一般の集落跡には通常無いもので、官衙など公的機関によく見られるものです。これらの建物が見つかった地区は過去のほ場整備などで数十cmの削平が行われていたようで、建物の時代の遺物と断定できるものは確認されていませんが、建物周囲では奈良時代の末葉から平安時代の初め頃とみられる土器が見つかっていますので、建物の年代も奈良時代から平安時代の初め頃とみて良さそうです。昨年度もＥ区西側の河川跡周辺からも大型の掘立柱建物跡が検出され、それらの建物との関連や、どのような施設であったかが今後の検討課題です。



調査区概要図

２間×４間大型建物(SB1002)全景（南から）

SB1003、1004(西から)

3　遺　物

昨年度の調査では、古墳時代の遺物は土師器、須恵器の他、勾玉や子持勾玉などが出土しました。平安時代の遺物は土師器、あかやき土器、須恵器の他、河川跡から多数の木製品が出土しています。

今年度の調査では、昨年度と同じく古墳時代の土師器や須恵器と平安時代の土師器、あかやき土器、須恵器といった遺物が出土しています。遺物が集中的に出土する遺構が検出されていないので、出土した遺物の量は多くはありません。

古墳時代の土坑からは当時の土器である土師器がまとまって出土しました。甕や坏、高坏など５～6世紀のものと考えられます。また、量は少ないのですが、近畿地方からの移入とみられる須恵器も出土しています。

また、近世からの用水路跡からは江戸時代後期から近代にかけての陶磁器が出土しました。

古墳時代土師器出土状況

古墳時代須恵器出土状況

Ｆ区建物付近の奈良時代末～平安時代初頭の土器

4　まとめ

昨年度からの調査で興屋川原遺跡については以下のことがわかりました。

興屋川原遺跡は大きく分けると古墳時代と奈良・平安時代の人々の暮らしの跡が見つかりました。

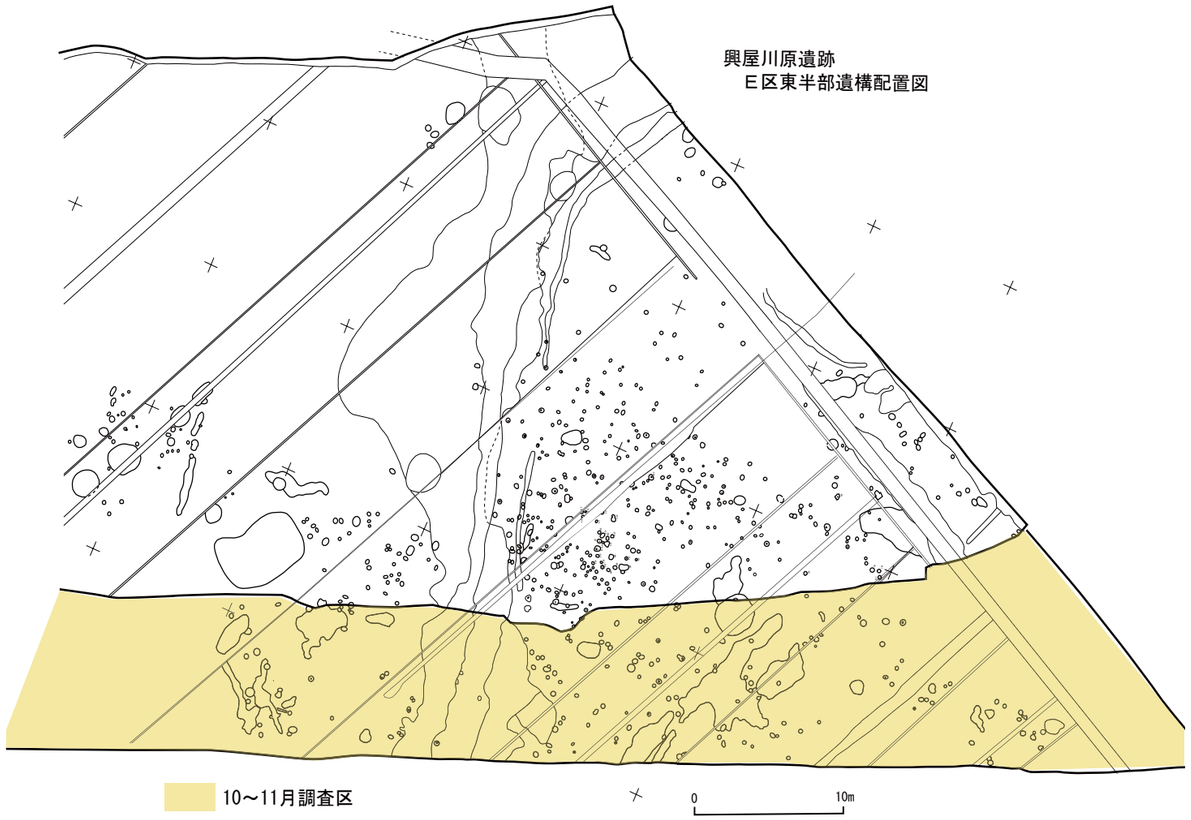
調査対象区内ではＣ区の東側に古墳時代の旧河川が、Ｅ区の西端部では平安時代の掘立柱建物からなる集落と当時の生活道具が多量出土した河川跡がありました。また、Ｅ区の東部には古墳時代の土坑などの遺構が発見され、ほぼ同じところに平安時代の小規模な掘立柱建物からなる集落があったようです。Ｆ区東部には奈良時代の終わり頃から平安時代のはじめ頃にかけての官衙的色彩の強い遺構群があり、Ｇ区には平安時代の柱穴群が分布していました。

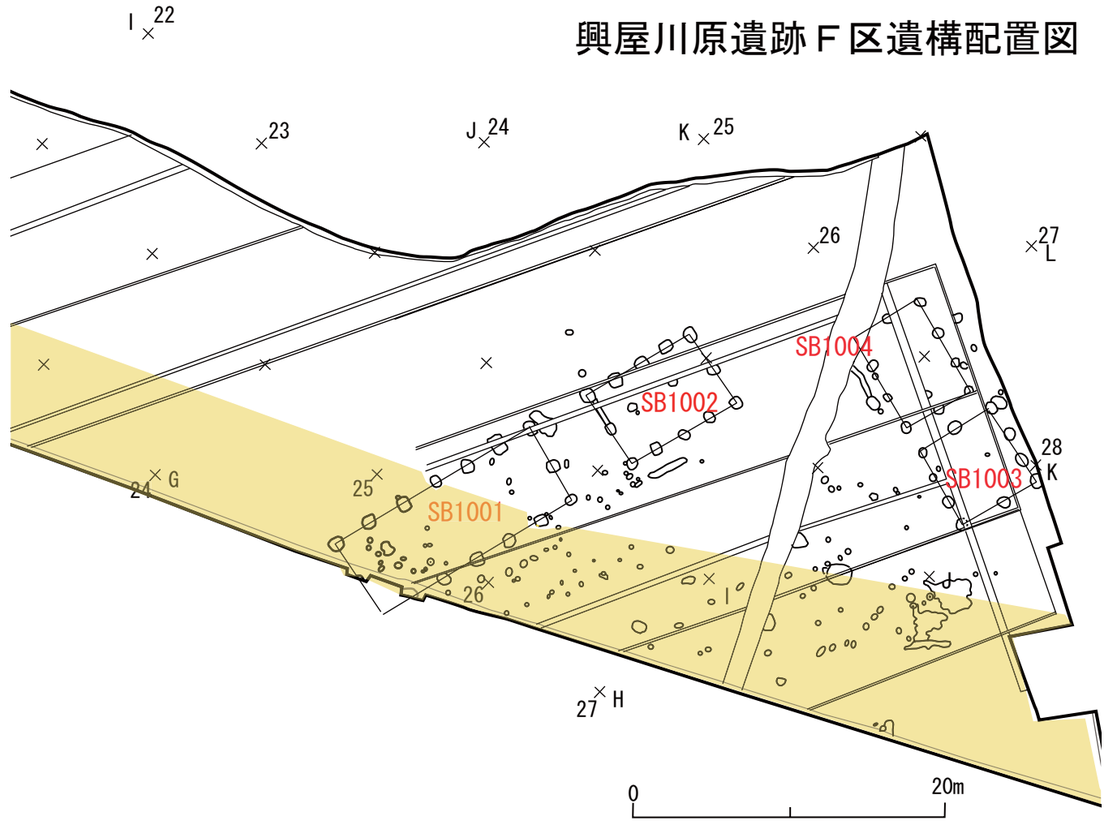
Ｅ区の中央部やＦ区の西部は古墳時代から低湿地となっており、平安時代以降の人々は集落のあった微高地から、湿地部分に土を移動して水田化を図っていたようです。

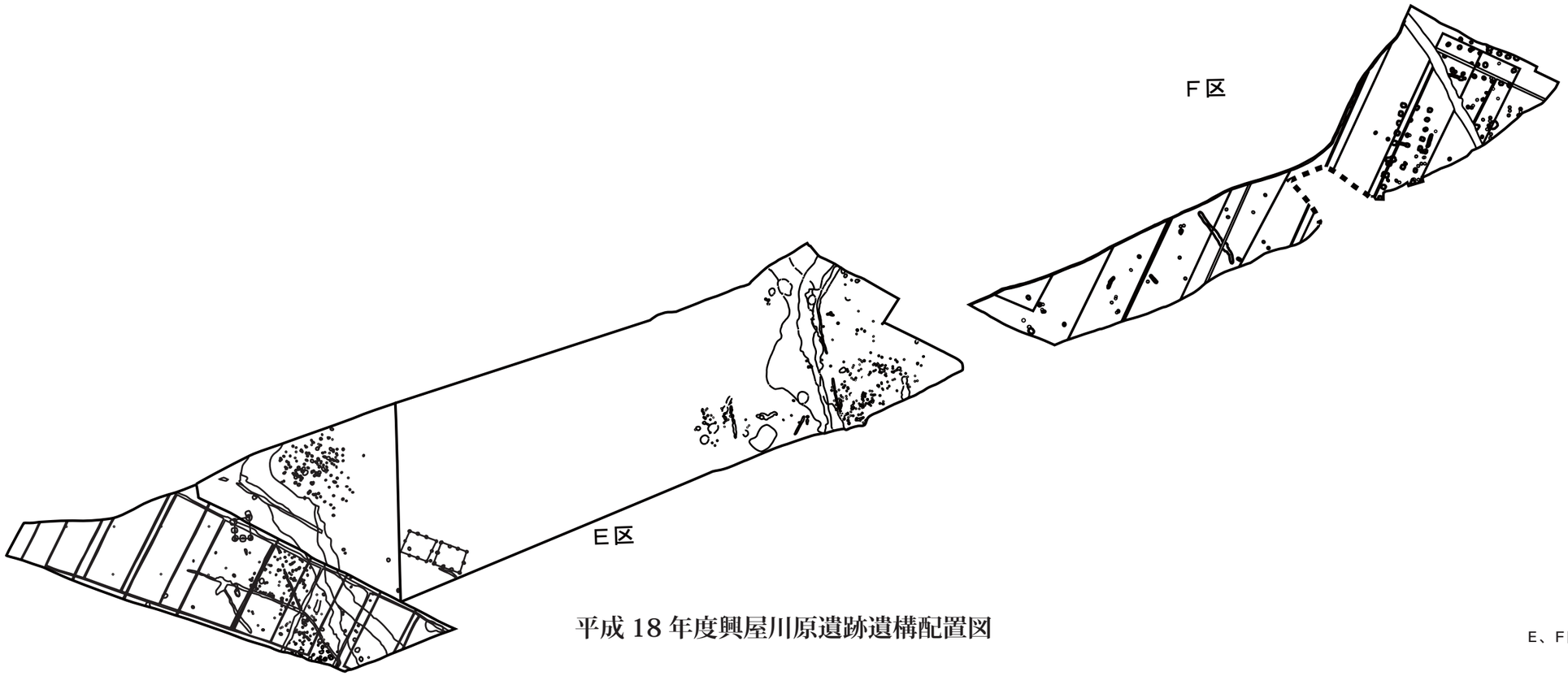
古墳時代の土坑などの遺構は、5世紀後半から6世紀にかけての時期と見られます。削平が影響したのか竪穴住居は見つけることができませんでしたが、落ち込みや土坑から土師器や須恵器、刀子、勾玉などが出土しました。鶴岡西部に展開した古墳時代の集落の一つであったことは間違いないようです。

平安時代は昨年度の調査で、２本の河川が重複し9世紀と10世紀の遺物が出土したことから、それぞれの時期に人々が住んでいたことがわかっていました。今回の調査で検出したＦ区東部の建物群はさらに古く、奈良時代末葉まで遡ることができそうです。これら、３つの遺構集中地区はそれぞれ、時期差があり、官衙、農耕集落とその性格も異なっていたようです。

Ｆ区東部が官衙であったとすればそれが何であったのか、時期の特定も含めて今後の重要な検討課題となります。







平成 18 年度興屋川原遺跡遺構配置図

Ｅ、Ｆ区遺構配置図（S=1：2,000）